

実況中継「土曜講座」

第3号

2026年6月13日発行

市川学園5月30日の土曜講座 於 國枝記念国際ホール

篠田 謙一 先生

博物館と科学

国立科学博物館顧問



篠田 謙一先生のご紹介

- 1955 年 静岡県生まれ
- 1979 年 京都大学理学部卒業
- 1986 年 佐賀医科大学助手
- 2003 年 国立科学博物館人類第一研究室室長
- 2021 年 国立科学博物館館長に就任
- 2026 年 国立科学博物館顧問（現職）

主な講義内容の紹介

2026 年第 2 回の土曜講座は、国立科学博物館の顧問を務める篠田先生による、博物館の目的・役割についての講座でした。

国立科学博物館は 1877 年（明治 10）に創設され、来年には 150 周年を迎える日本で最も歴史ある博物館です。日本全体が西洋化・近代化に向かう流れの中で創設されました。

科博では 500 万を越える資料を収集していますが、展示されているのは 2 万点ほどだそうです。なぜそれほど多くの資料を収集するのか、それは「何がいつ必要になるかわからないから」です。例えば、1856 年に発見されたネアンデルタール人の骨は、我々の祖先とは異なるものだという結論が出され、はじめは重要視されませんでした。しかし、解析技術の発展に伴い我々の祖先との混血が起こっていたことが明らかになり、2022 年のノーベル生理学・医学賞につながる資料となりました。これは、注目されなくなった資料を博物館が長期にわたり保管していたからこそ得られた結果です。

近年は誰もが情報の発信者になれるためか、専門家の声が一般に届きにくく、信用されないことが増えたという先生は仰います。これは、学校教育を終えた人の多くはその後科学に触れることが無くなり、知識のアップデートがされないことも原因の一つです。そんな状況を改善するために、「科学を生活の中に」入れることが必要だというのが先生のお考えでした。

受講レポートから

- 国立科学博物館は上野だけでなく、港区や筑波にもあることに驚き、一般公開されている時があれば行ってみたいと思った。自分は今まで博物館には標本を収集・保管・研究・展示をするだけだと思っていたが、世間に日々進歩している科学に興味を持ってもらえるような工夫や努力をしていることがよく分かった。（中 1 男子）



- 今まで何回か科博に行くことはあったけれど、展示の見方があるとは知らなかったので驚きました。その他の展示品にも様々な工夫があると知って、次に訪れるときは気にしながら見て回ろうと思いました。現在・専門家に対しての解像度が低くなっていることに加えてデジタル化が進んだことで一般の意見と専門家の意見が混同されていることについて、ニュースなどで詳しく専門家に聞くことには意味があるのだと感じました。（中 2 女子）



- 博物館に行かなくても、スマホとか映像を見られると思っていたけれど、実際の大きさにじっくり見られることはステキだと思いました。最後に博物館に行ったのが大分前なので、企画展をやっている時とかにまた行きたいです。（中 3 女子）

- 中学 1 年生の頃初めて受けた土曜講座が篠田先生の講座でした。私も 15 年ほど生きてきた中、何度も科博へ足を運ばせていただいています、まだ知らない展示や新しく知ること、前まで全然知らなかったこと、そして何より展示を通して気づく新たな発見で溢れていることに毎回驚かされます。過去から現在、そして未来に至るまでの科学のあり方が様々な人によって作られ、そこには博物館という存在がもたらした影響が大きく関わっているという話にはとても感動しました。過去からずっと一続きになっているその形を「文化」と表現するのは深い感嘆が出るほどステキな表現だと感じました。（高 1 男子）



- 国立科学博物館という施設の持つ役割の多様さや展示のこだわりの深さに驚愕した。今回の講演では情報社会の中で専門家の正しい情報をキャッチするためには常にアンテナを張り博物館をより身近なものと感じることが大切であり、そしてそれは学校教育を越えて科学に積極的に触れ続けることにつながると学んだ。（高 2 女子）



- 国立科学博物館は上野にある本館のイメージが強かったが、研究施設や自然を残した施設があると知った。特別展の意義として専門的な内容になるというだけではなく進歩する科学に対応する理由があるというところが、常設展のデメリットを補っている形だとわかった。私は文系に進んでいて、入試には科学の内容は出ないけれど定期的に博物館の展示を見に行くなど興味を持ち続けて学びたいと思った。（高 3 女子）

（文責：藤田 祐輔 先生）